

# 一人ひとりの運転習慣を可視化することで 気づきを促し、行動変容へと導く

Honda の交通教育センター (P16 参照) で開催している安全運転研修も、受講者一人ひとりにきめ細かく対応していくため、進化させています。鈴鹿サーキット交通教育センターで研修内容の 1 つとして実施している運転習慣チェックプログラムは、実走行で計測した客観的評価と、運転に対する質問に答える自己評価の結果を比較することで受講者に自身の課題に気づいてもらい、行動の改善につなげることを目的としています。同センターはプログラムのベースとなるシステムを (株) 本田技術研究所の新しい車両解析技術を活用することにより、DSP (Driving Style Proposal=運転行動スタイル提案) システムとして刷新。2017 年から本格的な運用を開始しました。



DSP システムを搭載した車両を運転、指定されたコースを走行。  
コースは 1 周約 800m。一時停止場所や急カーブ、上り下り、右左折、横断歩道の通過など 9 カ所のチェックポイントを通る

車内に設置されたタブレット端末の質問に自己評価を入力



アクセルやブレーキ、ウインカーの操作状況、加減速時などに発生する G (加速度)、コースの走行軌跡を測定したデータと客観 VS 自己評価が比較された評価表を配布 (1 回目)



参加者間で安全運転行動について走行の動画表示を見ながらディスカッションすることで気づきを促す



再度、同じコースを走行し、測定データと評価表を配布 (2 回目)。  
1 回目と 2 回目の測定データと評価表を比較して、自身の運転がどのように変化したかを確認



新たな気づきへ

DSP システムへの導入によって、個々人の運転習慣の可視化がより明確となり、評価への納得性が飛躍的に向上しました。受講者一人ひとりの実走行データ (運転操作の状況やクルマの挙動) と、一般的に安全とされる行動や操作を比較することで、受講者の新たな気づきにつなげます。

鈴鹿サーキット交通教育センター所長の平井真さんは、より説得力をもって受講者に伝えられるようになったと話しています。「運転経験の長い参加者も『きちんとできているつもりだったが、データを見て、できていないことがわかった』と納得していただけるようです。2 回の運転データを比較することで、どのように改善されたかも受講者に確認してもらうことができます」。

DSP システムによる運転習慣チェックプログラムを利用した受講者は「自分の運転行動が一目瞭然と示されるので、参考になりました。自分では気づかないことに気づかせてくれ、納得感があります」と感想を語っています。

この運転習慣チェックプログラムは鈴鹿サーキット交通教育センターでの様々な企業の安全運転研修で活用され、受講したドライバーのデータが蓄積されています。これらの蓄積から、自身の運転行動が運転者全体の中で、あるいは所属する組織の中で、どこに位置するのかを示すことができ、より納得性の高い教育に結びつけられると考えています。